

核撒用兵
の意初て
お其局を結

空前絶後
の世大台
の界國民

しむに足らず核撒固より之を知れり故に他日の凱旋の如く復た得意
を國人に誇視せざりし也然れども其羅馬に歸るや饗宴を開き遊戯を
張り以て民人の歡心と贊嘆を博せり當時羅馬市中には諸國より歸化
せる者多きを以て是等の爲めには別に其國々より歌舞娛樂に供すべ
き者を招けりと云ふ是に至て核撒か用兵の意始て其局を結ぶ
此際四方萬國の帝王諸侯は盡く使節を羅馬に發遣し以て是の豪壯
る羅馬共和國政府に服従するの誠意を表はせり是等の中には蒙流人
あり奴美電人あり高麗人あり意邊海人あり武烈頓人あり亞孟人あり
日耳曼人あり意士亞人あり其他指を屈するに暇あらず彼の蟠豹に苦
しめられ古龍士に辱しめられたる猶太人も亦悦で其修好の使を羅馬
に送れり又彼の嬋妍たる尼緣の女王も手に金冠を撃て其國土の殷富
と其綿纏たる艶情とを奉げて羅馬に來朝し空前絶後世界萬國々民の
大會合の盛儀奇觀に一層の光彩を粧へり

第七章 絶大なる建設家

彼既に破
るべき者
を破り環
を築き者
を壊せり

混沌たる
宇内は彼
の眼前に
横はれり

吾人は今既に核撒か高蓋に於て破壊家の大手腕を振ひ其餘威を以て
蟠豹大王を脚下に蹂躪し宇内を併呑し六合を振駭したるを見たり彼
れ將に何を爲さんとするか彼れ既に盡く其破るべき者を破り其壊す
べき者を壊せり其絶大なる破壊家の手腕今より果して何の所に用ひ
んとするか
今や宇内は紀綱も無く秩序もなく錯亂紛糾支離滅裂混沌として彼の
眼前に横はれり彼れ是れに於てか宇内の建設家たらざるべからず天
下の改造者たらざるべからず是れ即ち核撒か其胸中に豫期したる所
ありき之を驗ふるに彼の蒼穹に聳立する大厦高閣を建設せんとする

者○必○先○づ○所○在○の○茅○屋○小○家○を○撤○去○し○高○山○を○鏗○し○深○谷○を○埋○め○巨○木○を○斃○し○磐○石○を○碎○き○盡○く○舊○來○の○小○機○型○を○蕩○滅○し○然○る○後○ち○初○め○て○其○宏○壯○高○大○なる○大○圖○を○書○す○べき○が○如○く○凡○て○絶○大○の○建○設○を○爲○さ○ん○と○欲○す○ら○ば○即○ち○必○ず○や○絶○大○の○破○壞○を○用○ひ○さ○る○べ○か○ら○ず○是○に○由○て○之○を○見○れ○ば○核○撒○か○多○年○抜○山○壓○海○驚○天○動○地○の○大○手○腕○を○振○て○乾○坤○を○破○壞○し○區○宇○を○粉○粹○し○來○り○た○る○所○以○の○者○は○將○に○其○胸○中○に○畫○策○し○た○る○雄○偉○宏○大○さ○る○壯○圖○を○宇○内○に○展○へ○ん○と○欲○し○た○る○に○由○ら○ず○ん○ば○あ○ら○ず○

世界○の○歴○史○を○見○る○に○破○壞○家○其○人○に○乏○し○か○ら○ず○然○れ○ど○も○破○壞○を○知○て○建○設○を○知○ら○ざ○る○者○天○下○皆○な○是○也○徒○に○破○壞○を○快○と○す○る○者○是○れ○所○謂○民○を○毒○し○國○を○害○ふ○者○也○核○撒○の○如○き○に○至○て○は○則○ち○然○ら○ず○其○破○壞○家○た○る○や○其○胸○裡○に○貯○ふ○る○所○の○經○綸○を○天○下○億○兆○に○施○さ○ん○と○す○る○に○あ○り○豈○に○彼○の○所○謂○敵○々○た○る○小○破○壞○家○と○年○を○同○ふ○し○て○談○る○べ○け○ん○や○噫○呼○核○撒○の○如○き○絶○大○なる○破○壞○家○に○し○て○又○絶○大○さ○る○建○設○家○た○る○者○天○下○復○た○何○の○時○何○の○處○に

得○べ○け○ん○や○

核○撒○か○西○班○牙○の○役○を○終○て○國○都○に○歸○る○や○其○破○壞○的○事○業○茲○に○終○て○建○設○的○事○業○茲○に○其○進○路○を○啓○け○り○此○際○遍○く○人○民○に○告○て○曰○く○吾○れ○誓○て○蘇○拉○猛○黎○亞○の○如○き○慘○毒○な○る○悲○劇○を○再○演○せ○さ○る○べ○し○吾○れ○今○に○し○て○之○を○想○ふ○も○未○だ○嘗○て○悚○然○た○ら○ず○ん○ば○あ○ら○ず○今○や○吾○か○讎○敵○は○既○に○服○せ○り○吾○れ○將○に○吾○か○劍○を○横○へ○鞠○躬○盡○力○國○家○生○民○の○富○利○を○計○り○以○て○吾○か○仇○敵○の○心○を○安○す○べ○し○と○是○に○於○て○即○ち○軍○を○寢○め○戈○を○息○ひ○絃○維○を○廓○し○綱○紀○を○恢○し○天○下○を○體○恤○し○孤○獨○を○慈○悲○し○和○容○悅○色○德○を○砥○き○政○を○修○む○明○聖○顯○懿○豐○功○厚○利○是○以○て○六○合○の○中○翕○然○と○し○て○其○大○蘇○を○稟○仰○し○億○兆○の○民○沛○然○と○し○て○其○玄○德○に○沐浴○す○故○に○羅○馬○の○民○核○撒○か○大○慈○大○悲○の○爲○め○に○神○殿○を○建○て○其○前○に○跪○拜○合○掌○す○る○に○至○り○ぬ○

核○撒○又○其○畢○生○の○仇○敵○た○り○し○蟠○豹○か○塑○像○を○建○つ○る○事○を○許○し○た○る○の○み○な○ら○ず○復○た○自○ら○工○を○督○し○て○之○を○建○て○り○核○撒○の○仇○敵○も○猶○ほ○之○が○爲○め○に○隨

喜の涙に嗚咽せり。智世魯人に談て曰く、核撤か蟠豹の塑像を建設したるは、實に彼自身を建設せし者也。武良陀、圭士亞の如き、曾て己に抵抗したる者も、舉て司法長官の顯位に就かしめたり。後ち二人共に恩に反て核撤を暴虐するに至れり。

核撤深く自ら人民の愛望あるを恃て、曾て意を不慮の禍に止めず。其街道を歩する、從者を伴はず、寸鐵を帯びず、從容として群衆の中に逍遙せり。諸友深く之を患ふ。核撤常に以爲く、若し一朝事起らば城外の麾下に投すべきのみと。嘗て一友核撤を警て曰く、殿下今ま位大極を究め、六合悦服すと雖も、若し萬分の一匪類狂徒、肘掖の下に起り、卒然として急あらば、百萬の狄狄未だ頼む可らず、宜く護衛の士を従ふべき也。殿下の爲に、身命を以て衛護せんと欲する者、甚だ多し。核撤肯せずして曰く、男兒世に生れ、生て常に死を恐れんよりは、寧ろ一度ひ死するに如かずと。蓋し核撤が頼て以て、其衛護とあし、其金城とあす所の者は、國人の愛望

男兒生て死を恐るるに如かず
一たび死するに如かず

取刻も人
心を鼓舞
するに意
を用ひた

にして、是を以て尤も名譽ある、尤も安全なる護衛なりと思惟せり。是を以て彼れ常に饗宴を設け、或は米穀を分與し、以て平民の愛望を維ぎ、又無職の貴族には、高位顯職を與へん事を約し、既に職に就ける者には、更に榮譽と福利の地位を授けんとし、以て貴族の愛望を博せり。是の如くにして、貴族平民の心を壓足せしめ、天下の人をして希望を己に屬せしめ、欣々悦樂、萬民をして悉く其政治に心服せしめんと欲せり。故に彼は苟も人民の心をして喜悅せしむべき道あれば、曾て其術を盡さざるはなし。行政長官麻奇士、其任期將に盡くるに垂んとして、俄然死去せり。核撤直に列比離を舉て、其殘餘の任を襲ひしめたり。國務院の議官は、慣例に従て趨て之を祝せり。智世魯人に告て曰く、我曹疾く趨て列比離を祝せずんば、官職將に盡くるに至るべしと。以て核撤が頃刻も、人心を鼓舞壓足するに意を用ひたるを見るべき也。

斯の如く核撤が、民心を收むるに急なると同時に、共和國は歩一步に其

今日の共和は幻影のみ

國務院の價值を低減せり

運命を短縮し、核撤か權力の伸る所、凡て是れ獨裁君主の基礎に非るはなし。然れども猶ほ國務院、行政官、民會は古昔自由の形跡を存せり。核撤嘗て既に人に告て曰く、今日の共和政体は、但た是れ幻影のみ。其制度は徒に潜奪者か、自己の慾望を遂ぐるの機器たるに過ぎざる也。實に當時羅馬の政治は、共和の時代を去る甚だ遠しと云ふべし。其初め國務院議官は、三百の士より成り、皆な是れ國家の元勳にして、而して其位地は最高の權府なれば、國人の是に重を置きたるも、決して放なきに非ず。然れども核撤既に議官を、増減黜陟するの權力を有するを以て、其數を増加して九百名とさし、省地屬國の人、或は麾下の將士、甚だしきに至ては其俘擄を擧て、此尊榮なる議官の職を與へ、以て國務院の價值を低落せしめ、其尊嚴を滅殺せり。而して其議官の三分の二は、凡て核撤か偶像にして、唯だ其意に逆はん事を恐るゝ者也。斯の如く組織せられたる立法院は、其主宰者の奴隸犬鷹たるに至るは、勢ひ免れざる所ありとす。彼れ

國務院の卑屈核撤を然らしむ

巧に之を使役し、其名義に依て、盡く從來の國憲を破壊して、自ら畫策したる、新大帝國の創立に着手せり。而して國務院は、核撤か豫期したる所に差はず、其斧とさり、其鋸となり、其録となり、其錐とさり、日夜華々として之か爲めに勞し、殆ど核核をして赧然たらしむるに至れり。彼れは既に得たる其無限なる實力を以て、未だ足れりとせず、更に其偉大なる權威を表暴する、外觀を示さん事を欲したり。故に其國務院に劇場に競闘場に於ける、常に尊崇華美なる帝王の衣を着し、黄金の倚子に據れり。凡そ君王の君王たる所以の實は、即ち其位號尊崇を世襲するに由れり。而して彼れ既に之を有せり。今や其終身間得たる所の兵馬の大元帥の職并に教門上絶高なる第一高僧の位は、共に其子孫に世襲する事を得、十五年度の國家總裁官の位は、更に終身享有するを得べく、又五年間行政長官たるを得たり。彼れ實に總裁官として、萬機を統括し、行政長官として、行政の首座を占め、大元帥として、兵馬の大權を掌握し、民長

唯た得ざる者帝號のみと帝冠のみ
建設的事業の端緒

百八十二
として國民の代表者となり國務院の議長として國家參政會の主動者となり風教の監督者として天下の禮典を掌り最高僧官として國家の法教を司り吉凶禍福唯だ其命する所に隨て生ず實に是れ純乎たる絶對帝王のみ唯だ其未だ得ざる所の者ハ帝號と帝冠のみ。

核撒が内亂後に於て其建設的事業の端緒として着手したる所の者は、省地制度を改革し羅馬都城を修營擴張して華美壯麗を極め農工業を獎勵し運輸貿易の利益保安を計らんが爲めに羅馬より差敬灣に至るの間に巨溝を開き以て大伯の河水を通し毛呂綿多世知阿の大沼を排水して幾百萬畝の豐饒なる水田を作らんとし古倫西の地峽を開鑿し羅馬の近傍に堤坊を築き海水の陸地に氾濫するを防ぎ王須天近海の暗礁を除き爰に一大良港を開き以て通商の利便を起さんとするにあり又羅馬全土の精密なる地理の測量を成就し以て其地圖を製せんとせり此事たるや實に幾多の歲月と巨萬の費用を要すべき大事業なり

羅馬大法典の編纂

羅馬大帝の事業

とす又數百年來粉雜離滅せる羅馬司法官の律令法理學者の書翰審司の判決例大族世家の中に傳はれる說話習慣を蒐集し以て太古大伯河邊に勃興したる藪爾たる羅馬自治市府の法律が遂に數百年の星霜を経て宇内の法理學と發達進化せし沿革を示し以て一大羅馬法典を編纂せんと計畫せり而して此法典編纂の事業は既に彼の博學多識の智世魯か考想せし所なれども彼れは既に是を以て畢竟成就すべからざる大業にして唯に哲學者の希望たるに過ぎずとして絶望せり然れども核撒が鋭敏なる實踐的天才は忽ち此業の必ず完成し得べく又完成せざる可からざる者なるを觀破せり嗚嗚天若し核撒をして更に十年の生命を假さしめば彼は六百年前既に帝王立法家たる或士智安大帝の光名を先取せしや知るべき也。

彼は世界萬國を總合統一して悉く羅馬市民權を有せる人民を以て組織せる大帝國を樹立せん事を計畫せり想らく此雄大なる鴻圖を造就

せんには、武力を以て一朝一夕の間に爲す能はず、先づ徐に人心を此方向に誘導せしめざる可らずと。於是省地の羈絆を解き、其制度を一變し、以て其民望を收攬し、其貴顯富豪の人に與ふるに、羅馬大政府の大官高職を以てし、高蓋其他の國人を擧て、國務院の議官と爲し、有益なる職業を有せる人民の種類には、國の何たるを論せず、例へば希臘人の羅馬に來て醫業を爲す者の如き、悉く羅馬市民權を賦與し、又加娥太古倫西の大都を再興し、羅馬人の殖民地を啓き、伊太利に近き故を以て、柴細里人に市民權を與へ、戰捷の慶賀として、鐵鑽利國民に此權を與ふるか如き、事に由り情に托し、務めて羅馬市民權の圍籠を擴張せり。是れ皆核撤か畫策したる、萬國統一、羅馬大帝國創立の歩武に非らざるはなし。以上幾多の事業は、核撤か其破壊的の事業を終て、國都に歸りしより死に至るまでの、二年間の短日月に着手計畫せし所なりとす。

以上驚嘆すべき數多の新事業は、核撤の死後、其相續者に依て、完成せら

正
曆法の改

れたる者ありと雖も、多くは其身と共に空しく半途にして敗滅に歸せり。然れども彼の曆法の改正は、能く其功を生前に奏せり。此事業たる素より彼の法典編纂、羅馬帝國創立等の大業に比するに足らずと雖も、又是れ一大事業なりと云はざるを得ず。當時の曆書には、閏月の設おく、頗る不完全にして、曆書中に記載せる佳節祭典の日は、實際の期節と符合せず。曆書は爲めに其用を爲さず、故に農夫は、自ら無作法に天象を窺測して、以て其期節を推知せり。實業者の之か爲に、不便を蒙むる事實に少からず。核撤は職最高僧官にゐるを以て、常に天象に注意するの機會を得、大に天文學上の智識を廣めたり。是に於て曆書を改正せんと欲し、當時理學者の泰斗たる、楚士英の助力を得て、遂に一新曆法を發明せり。後世之を稱して、我麗亞曆と云ふ。此曆法永く羅馬に行はれ、今日の所謂太陽曆と大に異なる所なし。故に羅馬の新曆書は、當時萬國の曆書に比して、大に進歩せし者なりと。然れども當時の人、曆數の理を知る者なく、此改

良に不平を鳴す者も多かりき。特に彼の核撒の功名を嫉妬して止まざる徒は、之を以て馬嘲の好材料となせり。或人智世魯に告て曰く、奇なる哉、明日、月出てんと、智世魯の曰く、固より法律の斯く定むるに非ずやと、以て其感情の一般を見るに足るべし。然れども實業者の、其徳を受けたる事決して少からざる也。

核撒既に斯の如き、幾多の大業を其腦裡に畫策し、日夜華々屹々として國家の政事を鑄革し、律令を改定し、國利民福を起し、頃刻の間嘗て止む時なきか如しと雖も、猶ほ其胸襟は綽々として閑日月を存せり。當時羅馬政治家の、交際上の風習として、實に稱嘆讚美すへき者あり。彼等は晝間、訟庭議院に於て、辨難攻撃、互に是非を争ひ、曲直を論し、慷慨燃ゆるか如くあるも、公事を畢れば、即ち一堂に會し、交際場裡に翺翔し、洋々たる和氣の中に、文學、哲學、美術の高尙優美なる題目を説話し、談笑胸襟を開き、其政治上の懟恨讎念も春氷の解くるか如く、流れ去て、又跡を止めず。

羅馬政治家の交際

交際上の伎倆

是か爲めに、政治海の波瀾を滑かにする所の功德、實に大也。蓋し是れ羅馬政治家の、交際法に巧なるに歸せずんば非ず。而して羅馬政治家をして、斯の如く其美德を養成せしめたる所以の者は、當時羅馬徳義學の力興て大なりと云はざるを得ず。特に彼のエビキユラス學派の人の、交際法に巧なる者の如きは、古來未だ之有ざる也。核撒及其諸友は、皆此學派の主義を奉ずる者にして、交際場裡に趨走し、款語握手、最も核撒の得意とする所也。彼れは、風采秀美、舉動閑雅にして、常に綺羅爛熳たる、百萬の才子佳人か、其得意を演ずるの筵宴に於て、最も敏捷なる、最も快活なる、交際上の大達物なりき。

彼れ又歴山大王の如く、飲食を節制するの良性を有し、其食卓は山海の珍味を羅列し、葡萄の美酒、熊掌の佳肉、食前方丈なりと雖も、嘗て暴飲過食、一時の快を貪る事なかりき。彼れ固も身體甚だ虛弱なりしが、務めて力を體育に盡し、風霜雨露の下に、其筋骨を鍛鍊し、彼が不屈不撓の精神

と破るべからざる耐忍力は、遂に彼をして熱寒渴饑得て苦しむる能はざる。金剛鐵の軀體を造らしめ、彼が胸中に燃ゆる所の功名心と止まる處を知らざる大望は、遂に彼をして至極至大の地位に達せしめたり。是を以て觀れば、彼れ核撒か獨占したる億万の才識、大統領の器量の如きは、必ずしも天授に得たるに非ず。彼が千辛万難世の行ふ能はざるを行ひ、爲す能はざるを爲し、幾度か生死の衢たに出入し、險難崎嶇波瀾層々たる世に處して、敏銳潤達の奇才を運轉し、百万人類の嗜好性情を明かにし、冥々の中に遂に、其絶對的威徳者、億兆の總統者なるべきの器を解得したる者也。嗚呼、彼れ亦偉大なる自成家なる哉。

偉大なる自成家

核撒の侶

又核撒が親密なる侶伴中には、鋭敏ある事務家、馬兒武の如き、勤勉博識なる保王麗の如きあり、能く戦ひ、能く書し、能く論ずること、核撒に類せる波智亞の如きあり、温良篤厚なる歐美亞の如きあり、謹慎寛大なる麻智亞の如きあり、其他皆亦之に類す。是れ當世の俊才、君子にして、核撒常

千の梟雄の傑出する
使役する
獵師の犬
鷹を如く使ふ

天空海淵の度量

に是等の諸士と、談論燕遊するを無上の快樂となせり。凡そ核撒と其交を結ぶ者、未だ嘗て其聰明才識に服せざる者なく、其身邊は恰も一種の魔神界にして、之に接する者、之に觸る者、自ら高崇優美、微妙不可思議なる靈氣を感じ、尊崇愛慕の念を發せざる者亦し、彼れ又能く人材を擧用し、能く之を努力せしめて、歴く事なからしめ、又千百の梟雄傑出を、使役し、能く之をして獵師が、犬鷹を使ふが如くならしめ、其織々たる双手を以て、幾多狂雄を進退駕馭して、整然其調和を誤まらざる、恰も彼の巧妙なる樂人か、絃を錯弾して、嘈々切々、音節毫も紊れざるが如し、而して彼等をして、毛頭不平不満の情を起さしめざるが如きは、核撒が、万古獨占の伎倆として見るべき也。

彼れ度量の廣大なる、恰も大海の百川を入るゝか如く、恰も蒼天の萬物を蓋ふか如く、杳として其限まる所を知らず、故に其敵を見るや、己れの如く其仇を見るや、子の如し。其胸臆は猶ほ春の如く、仇恨も、嫉妬も、猜忌

温良優美なる性情

も、萬物一切來て此中に温乎たる恵みを受得すべし。其朋友從僕に對するや、温厚信懇、寸毫も蔽塞する所なく、其婦女を遇する、丁寧懇切と尊敬を以てし、其鴻恩ある慈母に對しては、崇尊と愛慕の誠意を奉け、其妻と最愛の一女に對しては、純粹無雜の愛情を以てす。其性情完全無缺、一點の微瑾さし、斯の如き温和優美の人、千古未たあらざる所也。

宗教の主義

彼れ宗教の主義に至ては、エビキユラス説にして、曾て鬼神の説を信せず。又凡て宗教の基礎たる、來世の教理を信仰せず。當時羅馬人か、尊敬畏崇して措く能はざりし、神託豫言の如き、輕藐蔑視、曾て半錢の價値を置かず。常に有神論者を罵嘲し、宗教の如きは、只だ天下萬民を統治し、又戰場に於て士氣を獎勵鼓舞するに、必要ある一機械として、之を用ひたり。彼れ事務を處す、神速明決、常に紛糾紊亂、千緒萬端の事務を一手に掌握し、之を處治裁理する、一刀亂麻を斷つか如し。其配下に使役せらるゝ、幾千の諸官か爲す所の億萬の事務、一として是れ核撒か、腦中より涌出す

彼れ一身は萬機活動の藪淵たり

兵を用ゆる神の如し

る者に非ざるはなく、恰も是れ核撒か一身は萬機活動の藪淵たり。彼れ事を處す、嘗て人に計らず、嘗て人の助言を求めず、獨思獨斷、一度ひ心に決する所あれば、嚴として動かさず、磐石路に横はり、鬼神之を妨るも成功せずんば、止まず、其自ら信するの厚き、驚くに堪へたり。而して彼れ果斷にして、機を誤らず、常に虎穴に入て、大功を奏せり。爛々たる彼の眼光は、間斷なく、機會の變に注視し、電光石火の間に、之を捕へ、一鞭千里、蒼穹に飛揚す。彼れ兵を用ゆる神の如く、士卒の心服する事、古今其類を見ず。核撒用兵の妙、蓋し茲に有て存す。彼れ戦にあるや、能く機に臨み、變に應じ、勝敗の運を毫厘一髮の間に左右し、神妙不測、敗を嫁して勝となし、禍を轉して福と爲す。其靈妙手腕、龍虎も争ふ能はず、鬼神も端倪する能はず。彼れ核撒か、千圍万戰に於て、常に偉功を奏したる所以の秘訣は、只一個の神速あるのみ。劍楯密々、万馬交馳、兩軍死闘、吶喊天を震ふの時に、當て、彼れ戰場の活機を窺へり。一度ひ乗すべきの機を見れば、乃ち全力を

擧て之を撃つ。嘗て瞬間の時を借さず、其軍を行る風颯の起るが如く、其敵を襲ふ。雷霆の撃つが如し、彼れ軍を覆へし、敵を破る。未だ嘗て之に由らずんばあらず。

彼は其蓄積せる巨大なる貨財を旗下の士に配ち、以て其慾望を厭飫せしめ、永く其精銳を我が旗下に服事せしめ、我が腦中に畫ける、更に遠大なる征畧に之を用ひんと欲せり、今や彼位は人類の大極に達し、功は宇内の廣さを蓋ひ、威は四海の外に加はり、名は八表の遠きに轟き、人生の榮華も茲に至て極まれり矣、然れども、核撒の人となり、安閑逸樂に、歲月を徒過する能はず、其鴻業を樹立する所の才畧と盡る時、亦大望は未だ此の光榮と勳業を以て足れりと思せず、其赫灼たる過去の榮華は、恰も春宵一夢の如く消へ去て跡無く、更に宏大にして、斬新なる榮譽と、光名を欲するの熱情は、勃乎として、其胸中に發揮せぬ、是れ即ち波斯大遠征の企圖なりとす。核撒が計畫したる此の雄圖は、先づ第一に波斯帝國を

征服し、其兵を驅て、比嘉細亞を畧し、裏海、高加索の間を跋渉し、率細亞に入り、北方の諸國を殉へ、日耳曼を横行し、高盧に出て、以て國都に凱旋し、斯くして羅馬の版圖を絶海に擴め、而して其疆域を確定せんとするにあり、於是令を軍隊に下し、愛温海を踰へて、伊賀霧の地に會せしむ、此大擧の數年の星霜を要するを以て、其不在中の準備を爲し、又豫め毎年の行政長官、司法長官、其他顯職に就くべき人物を指定し、重要なる政治の方針を前定し、將に波斯遠征の長途に上らんとせり、時は是れ紀元前四十五年の臘月なり。

第八章 英雄の末路

核撒が現時の地位は、實に是れ純然たる羅馬の獨裁主なりと雖も、未だ

嚴然たる帝王の名號を有せざる也。其果して帝王の大座を欲し、帝王の尊號を稱せんとしたりしや否や、未だ速に斷言すべからずと雖も、核撒の性、獨り其實力を有するを以て満足する者に非ず、又其名實を併有せんことを欲し、且つ其畫策したる萬國統合、羅馬大帝國創立の事蹟より之を見るに、敢て疑無き者の如し。是れ實に核撒の核撒たる所以、素より方に然らざるを得ず。然れども羅馬の國民は、猶ほ未だ核撒を立て、帝王と爲さんとは敢せざりし也。蓋し當時羅馬の民、其嘗て羅甸人種が有したる自治の精神、共和の稟性を銷耗せしと雖も、猶ほ數百年來の餘勢を存し、因習の久しき帝王の名號を聞けば、其利害正邪を考ふるに暇あらず、耳を蓋ふて慄悚する所也。核撒の力固より自立帝王となる易々たるのみ。然れども彼れが畢生苦心したる所の者は、潛奪の行爲に非ずして、誠心誠意國人が舉て自れを帝王の尊位に就かしめんと願ふを欲するにありき。彼れは實に心服せる國民を統治せん事を欲し、威力を以て歴

羅馬の民
帝王の名
號を惡む

核撒帝王
たらん事
を欲する
の實漸く
願はる

服し、中心不平、不滿の被治者を見るを欲せざれば也。

核撒か帝王たらん事を欲するの實、漸く人民の視聽を震ひ來るや、舊恨深仇、忘れ難く、猜忌嫉妬、止む時なき、讎敵は此機に乗して、核撒の人望を喪失せしめんとして、頻りに人心を煽動せり。然れども核撒の黨友は、彼をして此至尊極榮の位に昇らしめんと欲し、百方之が策を回らせり。遂に古書、神美倫シネポリの中に、羅馬人は帝王の下に従て戦はずんば、波斯人に捉つ能はずと云へる豫言あるを發見して、之を公衆に示しぬ。一日核撒カサ留波ルカより羅馬に歸るの途上、或人帝王の尊稱を用ひて彼を慶賀し、以て國人の意向を試みたりしが、國人の甚快からざるの感情あるを見て、之に謂て曰く、吾は核撒カサなり、帝王に非ずと。人民悄默として考ふる所あるか如し、核撒も亦快々として、群聚の中を過ぎて其家に歸れり。

我は核撒
なり帝王
に非ず

嘗て國務院の議官、核撒を尊崇光榮せし時、行政長官、高僧、貴族を率て核撒に謁し、國務院の奉呈したる光榮の事を語らんとす。核撒之を遇する

一 薩殿

下僕に對するが如く、牀に偃し、之に謂て曰く、吾が光榮を増さんよりは、寧ろ之を減するに如かずと。之を聽て貴族國務院の士、大に其驕傲を憤り、以爲く核撒共和国を蔑視する也と。人民も亦た之が爲めに、感情を害せし事少しとせず。此事たるや實に核撒が一蹶跌にして、平生遠謀深慮なる核撒の如き人にして、斯の如き舉動言語を爲すは、甚た信し難しと雖も、此時に當て核撒の光榮、其絶頂に達し、加ふべきの名譽なく、重ぬべきの尊榮なく、唯た聊か其胸襟を慰むるに足るべき者は、王號のみ、然るに國務院の群兒が、猶ほ屑々として、區々たる小榮譽、小功名を己の頭上に加へんとするを見て、中心自ら平なる能はず、滿腔の嘔吐は、遂て此言を爲せしや未だ知るべからず。彼は其結果却て人民の感情を害したるを見て、自ら其大に失錯せしを知り、直に家に歸り、其友に語て曰く、我れ今日初めて我か膝を屈せざるを得ずと。而して其宿病の爲めに、精神錯亂せしを以て辯解し、將に之を以て謝する所あらんとす。友人馬兒

留波嘉の祭典

武核撒を諫て曰く、殿下は今、核撒たるを忘却せられたる乎、彼輩をして殿下に臣事せしむ、豈に不可あらん哉と。

時に羅馬に留波嘉の祭典あり。此の祭典は頗る異様にして、名族の貴公子、其他高位高官の士は、裸体にて手に柔皮の鞭を把り、群を爲して街道を疾走し、鞭を以て途上の人を撃つ。名家の子女、貴婦人は、皆な出で、路傍に佇み、手を伸して争て之に打たる。蓋し之に打たる者は、安産を爲すと云へる傳説を信するを以て也。此日核撒凱旋の戦袍を穿ち、黄金の椅子に據て、祭典の儀を觀せり。安敦時に行行政長官たり。祭典の慣例に従て、又一群の中にあり、既にして其一群公會場に至るや、衆人皆な路を啓けり。安敦即ち進て、核撒の前に至り、月桂樹の葉を以て裝飾せる帝王の冠を核撒に奉呈せり。群民中之を贊する者甚た少し。於是核撒王冠を退く、喝采の聲震ふ。安敦再び王冠を採て、核撒に奉ぐ。贊する者前の如し。核撒又之を退く、喝采の聲再び起る。是の如くする三度、人民遂に之を贊

安敦三度
捧ぐ三冠を

せず核撒以爲く時機未だ熟せずと乃ち之を退て曰く我は帝王に非ず
羅馬の帝王は獨り我備德星神の名あるのみと人をして之を神殿に納
めしむ。

匪類六十
余人黨を
結て核撒
を斃さん
とす

此時に當て、貴族中恨を核撒に抱き、又其威名を嫉む者あり、匪類六十餘
人、陰に黨を結て、核撒を斃さんとす。是の凶黨の中に於ては、平素深く核
撒に阿諛し、之が爲めには身命をも顧みざるべしと誓言せし者あり。又
其高恩を擔ひ、其寵庇に由て、今日の榮華と富貴を得たる者あり。泥土麻
は、深く核撒の信任と愛顧を受け、請ふて南高盧の都督となり、津列暮は
亞細亞の都督となり。其他嘉須加、秦婆等の如き、亦其恩を受けたる事
尋常に非ず。然れども亦相結て核撒を殺さん事を計れり。兇黨の主謀人
たる圭士亞は、生命を核撒に受け、其後司法長官の高職を得たり。嘗て行
政長官たらん事を望て、未だ允されず、以爲く核撒己を遇する甚だ薄し
と。是を以て大に之を惡む。又核撒の功名盛なるを見て、嫉妬に堪へず、心

圭士亞の
人となり

兇黨は狐
群狗黨の
み

陰に之を害せんと欲せり。元來其人と爲り、エビキュラス主義にして、自
由と云ひ、共和と云ふが如きは、敢て其意とする所に非ず。唯だ傲慢にし
て、猜忌深く、一度ひ恨めば終生之を忘るゝ能はず。時として、は卑屈極ま
りなく、時として、は鹵莽檢束なく、固より一定の見識ありし。要するに兇黨
の士、皆な是れ核撒が大名を嫉妬し、毫厘の仇念忘るゝ能はざる。狐群狗
黨の類のみ。國家の自由、共和の亡滅を慷慨して、之を挽回せんとするが
如き、有爲の精神を抱ける者、曾て存するまじし。於是兇黨陰に計て、名望あ
る人を誘ふて、其黨首と爲し、以て衆人の誹言、謗議を蓋はんとし、遂に武
良陀を、其黨に誘導せり。蓋し武良陀は、父統より之を云へば、古昔羅馬共
和國の創立者、大武良陀の遠孫にして、其母ハ差美麗の名族に屬し、復た
彼の剛直正義なる、敬東の甥、且つ其女婿たり。其性甚だ自由を愛し、獨裁
專制の政躰を憎めるを以て、國人深く武良陀を尊信せり。是を以て兇黨
の士、武良陀を抱き、以て其臭を蓋はんとせり。然れども彼れ核撒の恩に

兇黨武良
陀を載て
其真を蓋
はんぞす

浴する、決して一日に非ず、彼世里の敗後、其の生命を救ひたる者ハ、核撒也。其幾多の親友の生命を救ふを許したる者は、核撒也。光榮ある司法長官の顯職を興へたる者は、核撒也。又其競争者に扱で、行政長官の高官に就かしめんと定めたる者は、核撒也。核撒常に赤心を推して武良陀を遇し、之をして顯明高貴の地位に立たしめ、之を信愛する尋常一様の比に非ず。彼れ素より核撒か、共和政體を破て、獨裁帝國を創立するの志あるを知る。然ども之に背かん乎、此大恩を忘るゝの誹りを如何せん。之に従はん乎、國人の嘲を如何せん。躊躇遂巡決する能はず、兇黨の士、之を見て想へらく、奇貨措くべしと陰に匿名の書を作る。曰く、熟睡せる哉、武良陀よ、汝は武良陀に非らざる也。矣と。曰く、起きよ、武良陀、羅馬の自由は汝に懸れり、自由の爲に暴君を斃せ、武良陀出でずんば蒼生を奈何と。屢之を法庭の机上、或は常に武良陀の坐せる椅子の上に置けり。武良陀之を見て、果して心神頗に激昂せり。於是、圭士亞、交を武良陀に求め、深く相結

匿名の書
を作て武
良陀を激
す

核撒早く
圭士亞の
異圖ある
を疑ふ

托して、遂に其黨に誘へり。核撒早く既に圭士亞か、異圖あるを疑ひ、其友人に謂て曰く、諸君、圭士亞を揣る、果して如何、余は甚だ其顔色の蒼白なるを惡むと。又嘗て人あり、安敦、怒羅武の核撒を害して、政府を顛覆せんとするの企あるを訴ふ。核撒笑て曰く、余は是の如き、肥滿豊裕の人を意とせず。寧ろ彼の蒼白憔悴の人を恐るゝ也と。蓋し武良陀、圭士亞を云ふ也。

此時に當て、核撒が計畫したる、波斯遠征の大準備全く成るを以て、將に羅馬を出發せんとす。乃ち三月十五日を以て、國務院を招集せり。凶黨は此日に乘して、核撒が國務院に入るを俟て、直に戕殺せんとせり。

古來英雄豪傑の覆亡するの時に當て、屢奇怪ある先兆の生せしと云へるは、偶然の事にもせよ、吾人が其傳記を讀て、屢見る所也。吾人復た核撒の死期に臨て、之有を見たり。一人の豫言者あり。三月十五日は、將に一大災害の、核撒の頭上に、墜落し來るべきを警戒せり。然れども核撒敢て意

預言者三
月十五日
を驚む

を止めず。既にして三月十五日は来れり。核撒將に國務院に行かんとす。笑て其豫言者を顧て曰く、三月十五日、今日既に來れるに非ずやと。豫言者徐に之に對て曰く、然り、今日來れり。然れども、三月十五日は未だ盡きず。殿下幸に自重せよと。

暗殺の起りし前夜、核撒諸友と共に晚餐を喫せり。彼は平生の如く、食卓に向て舊狀を披讀せしが、會ま一坐の中に、死は如何なる死を以て、最も良しと爲すやと云へる。奇異なる論端起れり。此時核撒直に之に應て曰く、卒然死するを以て、最も望む所也と。豈料らん、是言竟に其讖を爲すに至らんとは。

一言料ら
ず死讖を
爲す

其夜核撒は夫人敬巴仁と共に、一室に臥せり。深夜俄然として窓戸一時に開き、月色皎々として寢室を照らしぬ。驚き醒むれば、其夫人の熟睡して、屢々奇異なる語を發し、苦痛悲嘆するか如き呻聲を聽けり。翌朝に至て、夫人の核撒に、昨夜夢に、君の殺害せられ玉ふを見たりし事を告げ、切

夫人敬巴
仁の惡夢

に其日國務院に臨む無らん事を懇請しぬ。且つ之に謂て曰く、若し妾か言を信せずんば、願くば神前に犠牲を供へて、其誼託を乞ひ。又ト者をして、其吉凶禍福を占はしめ玉へと。核撒平生能く敬巴仁か、心神剛毅にして、嘗て執迷の事無きを知るを以て、深く之を怪み、即ち其言に従ひ、犠牲を供し、神誼を乞ひ、又吉凶をトせしむるに、皆亦不吉ならざるはなし。於是其言に従ひ、使を行政長官安敦に遣はし、國務院の出駕を止むるの旨を告げんとす。泥土麻想へらく若し核撒、今日國務院に來らず、集會を迂延するに至らば、我黨の陰謀、或は發露せんと。乃ち核撒に謁して、其占筮誼託を愚弄し、又夫人の夢事を嘲笑し、之に説て曰く、若し殿下斯る執迷の説を以て、國務院の出駕を停めば、千歳人の笑を如何せんとするや。且つ國務院の議官は、今や殿下の招に應じて會合し、殿下を以て羅馬諸省地の帝王に奉し、伊太利以外、何れの地を問はず、帝王の冠を被り、帝王の尊號を用ゆるを許さんとして、方に殿下の來るを俟てり。然るに殿下若

泥土麻能
辯を弄し
欺て核撒を

い一旦使を遣て出駕せざるを告げは、議官は各其家に歸らざるを得ず。果して然らば、夫人吉夢を結はんか。然れども國務院の士、或は是より殿下を怨望し、却て不測の患生ずる事なき乎。陰に殿下の爲めに之を恐る。若し殿下斯の如き婦女執迷の説を信せざるを得ずんば、深く殿下の爲めに之を悲まざるを得ず。宜く自ら國務院に趨て、其集會を延引せざるべからざるの理由を陳せよと、言ひ畢て直に其手を執て、門外に誘引せり。

行く事未だ遠からずして、一人の奴あり、凶黨の陰謀を聞き、之を核撤に告げんとせしか、人民山の如く、核撤の身邊を圍繞するを以て、近て之を告ぐる事を得ざりしと云ふ。

久寧^{クニシテ}尼人^ニに阿帝美^{アヂミ}と云へる人あり、羅馬に來て、子弟を集て、希臘文學を教授せり。交遊亦甚だ廣し。此人武良陀^{ブライダ}の親友、某と知己たり。陰に凶黨の陰謀を聞く、乃ち詳かに之を書に認め、此日路に核撤を要して、之を呈せ

り、核撤取て直に之を其侍史に渡せり。以爲く請願の事のみと、阿帝美^{アヂミ}進み近て曰く、殿下、其書は殿下の身上に、至重の關繫を有せる事件を記す。速に親展せられよと。核撤即ち再び侍史より其書を取て、屢之を讀下せんとせしも、左右より請願する者、續々として絶へず、之が爲めに、一讀する能はずして、遂に空しく、之を手にして、國務院に到りぬ。此日凶黨の議官が集會して、慘憺たる悲劇を演出したる一堂に、蟠豹將軍の塑像屹然として立てり。是れ蟠豹が嘗て其壯麗ある劇場を、裝飾せるが爲めに作りたる者也。此堂に會したる凶黨の議官は、其像を見て、心に其日の企謀の成就せん事を祈らざる者なし。彼の圭士亞^{カウシア}の如き、平生深くエビキエラス主義に偏し、大に他力説を排斥愚弄せる者なりと雖も、此大事を企て、危惧存亡の機に臨では、平生の意思も、頓に消へ蟠豹將軍の像を顧み、心陰に其神靈の救援を求めたりと云ふ。此際凶黨の核撤を待つ者、心中皆な畏懼せざる者なし。蓋し陰謀既に發覺せしかと疑ふべき機、屢々顯

はれしを以て也。一議官あり、圭士亞に謂て曰く、公秘事を以て我に告げずと雖も、武良陀既に其巨細を談れりと。凶黨の士之を聞て皆な顔色を失す。然れども其實陰謀を知れりと云ふの意に非ずして、近時圭士亞か頗る素封家と成りたる秘計を知れりと云ひなりき。又一議官あり、武良陀、圭士亞に告て曰く、公等勉めよ、吾か希望する所は公等に同じ。然れども公等躊躇する勿れ。蓋し事既に發覺せりと。核撒か國務院の戶外に到る時、此人走て核撒に談ること數刻、極めて意を傾けて之を聽く。凶黨之を見て、屏息凝視、想へらく大事去れり矣。彼れ陰謀を以て核撒に告くと。既にして彼れ話し畢て、核撒の手を吻して去る。是れ一事を請願せし

の標なり。於是凶黨蘇するの思ひあり。
安敦は核撒の股肱、核撒の爲めには身命を致さんと誓へり。此人驍勇絶倫、猛悍卓群、凶徒皆安敦の核撒に従て、國務院に入らん事を恐れたり。阿留微一計を設け、事に托して安敦と談話し、以て時を移し、核撒に従は

謀殺の相

一隊の猛獸を圍つて濫撃する如し

ざらしむ。既にして核撒の國務院に入るや、議官立て之を敬す。凶黨の士迷暈理、秦婆と共に進て核撒の邊に至り、詐て秦婆の兄の罪を赦さん事を請ふ。核撒聽かず、二人切に請ふ。許さず。既にして核撒其席に到る、二人強請して猶ほ止まざ。核撒乃ち赫として怒る。秦婆雙手を以て核撒の外袍を剝く。是れ凶徒謀殺の相圖也。嘉須加先づ匕首を抜て、其頸を撃つ。核撒願て其手執へ、叱して曰く、奸賊嘉須加何の狼籍ぞ。嘉須加震擻叫て曰く、救へ救へ。於是凶徒皆な匕首を抜き、進で核撒を圍む。凶黨の陰謀を知らざる者は、事卒然として起り、悉く其度を失し、驚惶錯愕爲す所を知らず。既にして凶黨の一群は、渦くか如く、核撒か身邊に蝟集し來り、各匕首を核撒か頭上に閃かし、恰も一隊の獵夫か、猛獸を圍て濫撃するが如く、皆な互に争て、核撒が肉を屠り、核撒か血を濺がんとせり。武良陀も亦匕首を揮て、其の大恩人たる核撒か腿凹を撃つ。核撒固より身に寸鐵を帶びず、空拳を揮て抗對し、四肢五体、創傷餘す所なく、鮮血淋漓として逆

出する。雖も尙は百戰百勝の餘威を鼓舞し、叱咤搏闘せしが、忽ち武良陀が劍を擧て我を打つを見るや、一睨して曰く、咄汝武良陀も亦然る乎。即ち外袍を以て、其面を掩ひ、竟に蟠豹が背像の脚下に斃れて死す。創を受くる二十有三、凶徒多く傷く、神氣錯亂して、互に相擊刺せしか爲也。嗚呼、嗚呼、天乎、命乎、大功作武光前耀後、武威四海を歴し、功名百代に轟き、其智勇は乾坤を抱括し、其才畧は鬼神を驚動したる、今古未曾有の大英雄は、今や空しく一朝凶黨の毒手に罹て斃れぬ、是れ實に紀元前四十二年三月十五日の事なりとす。

第九章 核撒の死後羅馬の形勢

凶黨の核撒を殺害するや、武良陀將に國務院に説く所あらんとす、然れ

ども議官復た一人として之を聞く者なく、皆な惶懼逃れ歸て其家に隠れり。此報一たび市中に傳播するや、國人の驚駭明狀すべからず。詭言百出、東西に狂奔し、南北に交馳し、或は其舖店を鎖すあり、或は其家財を捨て山谷に遁逃する者あり、紛雜混亂、歸する所を知らず。既にして凶黨の一群は、醉狂惑亂、手に鮮血滴々たるを、首を揮ひ、國務院より、公會場を指して疾走せり。大に叫て曰く、自由を得たり、自由を得たり、共和國万歳と行く行く、人に遇へば之を要して、核撒を殺害したる理由を語れり。共和黨の士は、絶叫歡呼、凶黨の群に投して、公會場に趣けり。智世魯も亦來て凶黨を賀し、羅馬共和國の自由を得たるを祝せり。今まや多年核撒か、足下に屈服したる、梟雄桀獠の諸將は、獷起正義を楯と爲し、彼等か滿腔の慾望を施さんとするの時期到來せり。安敦最も衆衆に卓拔す、彼れ器量未だ万人に長たるに足らずと雖も、亦能く兵を用ひ、驍武猛悍、深く核撒の信任を博し、其剛毅ある氣象と、傲放の膽力とを

核撤の大者

武良陀核撤を殺害せし理由を公衆に演説す

二百十
以て既に勇名を天下に轟かせり。是を以て人皆な陰に安教を以て核撤が大権の相續者たるべき人となせり。又安教陰に使を核撤の夫人に遣て、悉く其私財遺書を得たり。此年烈羅士安教と共に行政長官たり。彼れ又武勇安教に類し、性甚だ桀驁にして、亂を好み、安教乃ち萬金を以て、烈羅士に賂ひ、協力同心共に爲す所あらん事を約す。此時に於て、泥士麻は鬪客の一軍を以て、蟠豹の劇場に據り、核撤の諸將は兵を率て城外にあり。將に一戦を以て知己の讐を報せんとす。嗟、屍山血雨の慘劇を、郷城に演出する指頭の間にあらんとす。

武良陀及び其徒黨は、公會場より來て核撤を殺害せし理由を、公衆に演告せり。衆鬱黙沈思して、其演説を聽けり。然れども其鬱黙の間には、無限の感慨を表はし、深く核撤が非命の死を遂げたるを悲しむ者の如し。於是國務院は善後の策を議し、兩黨の間に周旋し、其怨隙を調和し、以て國家の平和を維持せん事を計れり。先づ議して曰く、核撤は公正なる統治

矛盾せる議決

内亂の禍機は如何なるか

者なる乎。將た暴戾なる僭奪者なる乎。此議題は頗る難問にして、當時國務院の議官の大半は地位財産共に之を核撤に得たる者にして、若し核撤を僭奪者と議決せんか、自家の地位財産を失はざるを得ず。將た公正たる統治者とせん乎。武良陀及其與黨を誅し、又其國態を奈何せん。於是國務院は矛盾せる議決を爲して曰く、核撤の所爲は悉く適法にして、凶黨の爲す所又正義なりと。又安教、烈羅士をして、其子を出して、圭士亞武良陀に質となさしめ、而して四人一黨に會して、和睦の筵宴を開く。斯の如くにして、核撤黨の補領と、凶黨の巨魁は、爰に讐念を散して親友となり。共和黨の士、想らく國家の平和期して待つべき也と。然れども是れ、只將に來らんとする、恐るべき内亂の外面を粉飾塗沫するに過ぎずして、其内部に潜伏する禍機は、熾々として猶ほ燃ゆるか如き也。安教、仍は衆多の猛卒を擁し、巍然として萬人視聽の中に屹立し、陰然羅馬の主權を握れり。國務院は國葬の大禮を以て、核撤の遺骸を葬ら

葬典の形

ん事を命せり。安教アノトコ即ち葬主となり、至崇至尊の大禮を以て、其遺骸を公會場に運ひ、幾百万の市民は來て此大葬の儀を觀せり。安教密に此時に乘して民心を激せんと欲し、豫め之か備を成せり。今其葬典の形狀を示さんに、核撒の遺骸は黄金と象牙とを以て、造れる臥床の上に横て、金色燦爛たる高壇の上に安置せられ、凶黨の匕首を以て截裂せられたる、金紫の外袍は、靜に其上を蓋へり。又別に白臘を以て核撒の軀を作り、皮肉割裂し、鮮血淋漓たる慘狀を模寫し、之を公衆の眼前に呈露せり。國人其平生景慕崇敬せる、大恩人の慘毒なる悲況を眼前に見るや、哀痛慟哭するに至りぬ。於是安教アノトコ立て、核撒の遺書を朗讀せり。遺書に曰く、大伯河邊にある、宏壯なる核撒の園圃を、永く人民に付與し、又三百セクタースの金を、各國人に分配すべし。云々。於是民心頓に激昂し、核撒か中心深く國人を慈愛するを知り、皆な相共に此大恩人を殺害せし、瘴惡なる凶黨に復讐せざるべからずとの念を惹起せり。安教即ち又核撒の爲めに、其願

遺書を讀んで民心激す

國人の迷亂を感

演を爲す。先づ核撒か智勇寛仁の大徳を述べ、古今未有の俊傑たるを明にし、且つ深く國人を慈愛せし事を、遺書に依て之を證し、國人たる者宜く其高恩を感謝せざるべからざるを告げ、次に此の國家の大父、最大聖徳の人に向て、凶刃を加へたる、不法の所爲を陳し、來り更に核撒か割裂せる、四肢五臓の創傷を指摘し、或は截斷せる、金紫の外袍を掲げ、其截痕跡を示し、是れ某か親友核撒を刺せし所也、是れ某か匕首を以て、其恩人核撒を撃ちし所也と説き、最後に百尺竿頭更に一步を進め、揚言して曰く、假令ひ國人は其大恩人、大俊傑の精靈をして、空しく恨を吞で逝かしむるも、吾れ豈に獨り知己の爲めに、讎を雪がざる可けん哉と論結し、國人をして迷亂狂惑せしめたり。群民既に禁する能はず、或は官署より、或は市店より、椅子卓案、手に隨て取り、核撒か遺骸の上に疊積し、火を放て之を公會場に於て火葬せり。嘗て核撒に隨て、四方に轉戦したる宿將猛卒は、之を見て悲感極て、佩劍戰楯を堆積の上に抛ち、貴婦淑女は、其

核撒を受
惜せし者
豈に獨り
羅馬人の
やみならん

頭飾、服裝を取て、爛々たる父中に投じ、以て崇敬、哀感の情を表せり。核撒を愛惜せし者、豈に獨り羅馬市民のみからんや。此日葬儀に參會せし、雲霞の如き群民の中にあつては、高麗、西班牙、亞非利加、其他東方諸國の人ありしが、皆な其鬚澹たる火光、煙色を望見して、双行浪々の涙を灑かざる者あかりき。

於是群民燼餘の火を把て、凶黨の家宅を燒かんと走る者あり。凶黨を屠て、其肉を啖はんと叫ぶ者あり。然れども此時既に凶黨の士は、人民の激怒非常なるを見て、難を恐れ跡を隠まし、羅馬を遁れて、四方に奔竄せり。核撒の一友に、信奈と名くる詩人あり。時に熱を病て、床蓐に臥せり。核撒の死するの前夜、奇怪なる夢を見ぬ。夢中核撒來て、信奈を晚餐に招けり。信奈堅く之を辭す。核撒聽かず、手を執へ強て其家に誘へり。既にして翌日、核撒の虐殺せられたるを聽き、昨宵の奇夢を回想し、坐ろに感慨に禁へず、最後の光譽を爲さん者と、病を力めて公會場に到れば、一人あり、近

凶徒羅を
恐れて四
方に奔竄
す

武良陀圭
士亞陰
を遁逃す

きて信奈に其名を問ふ。信奈之に答へて、核撒が友人、信奈と云へる者ある事を告げり。然るに其名、忽ち廣衆中に傳聞し、人民蟻集し來り、忽ち信奈を打て之を殺し、骨肉悉く粉粹するに至りぬ。蓋し凶黨の一人に、彼と名を同ふする者あり。人民誤て其人なりとみし、終に茲に及びし也。武良陀、圭士亞、陰に之を聞き、人民の激怒斯の如く、其復讐の鋒銳犯すべからざるを見て、驚怖の念に堪へず、數日ならずして羅馬を去て遠く遁逃せり。

核撒の死する時に年五十有六。蟠豹に後る、事四年也。夫れ核撒が畢生の目的としたる所は、帝王の位號と、其實力とを得るにありき。其千難萬艱の中に入し、生死の途上に奔走し、其洪大靈妙の智畧を運用し、粉骨碎身事に従ひたるも、畢竟之を得んか、爲めに外ならざりき。彼れ既に帝王の實力を占得したりと雖も、未だ帝王の名號を得る能はざりし也。其胸中に畫策したる大業の半途にして、空く凶刃の禍に懸て斃れぬ。吾人

若し核撒が生前にありて、其偉大なる雄圖鴻畧を協成せしめたる、靈神の威力が、猶ほ能く其死後に至るまで、其仇報者となり、海に陸に、其匪類凶黨を驅馳追搜し、核撒の血を以て、其劍に濺ぎたる者、及び核撒が死を賛稱せし者をして、一人も此世界に生息せしめざるに到るまで、敢て其殺機を停めざりしを見れば、實に驚嘆に堪へざる也。

核撒の死するや、一大彗星天の一方に顯出し、耿々として、光芒万丈、七日七夜にして息滅しぬ。時人之を見て、核撒の靈既に星辰の列に加はれりと爲せり。又其年は大陽暗淡として青色を帯び、又赫灼たる光輝と焔々たる暑熱なし。之が爲めめに、大氣常に朦朧として鬱閉し、五穀熟らず、草木生色なきに至りぬ。天地萬有、凄慘として、恰も此の非常雄大なる人傑の世を去りしを悲吊する者の如くなりしと云ふ。

核撒の死は、以て國家をして、暴君專制の羈絆を脱せしむべく、共和の基礎を堅ふし、泰平の天下、日を指して俟つ可とは、是れ共和黨の士が夢像

一大彗星
顯はる

天地の非常
雄大なる人傑
の世を去りし
を悲吊する
者の如し

第二の三
傑同盟政
治

智世魯の
犠牲

したる所ありと雖、天下の大勢は、既に共和の時運に非ず、假令核撒を刺すも、帝政遂に停む可に非ず、且つ是よりして此大國土を調理し得るの大才無く、羅馬世界政治の大機關は、其運轉者を失ひ、滯滞して動かす、封疆茲に瓦解し、國家茲に潰敗せんとす。此時に當て三人の暴主は、相並て政治壇上に顯出し來れり。曰く安敦、曰く烈黨、曰く屋大唯、是なり。於是第二の三傑同盟政治復た興れり。嚮に共和黨の人か、核撒の暴政を行はん事を慮りしも、今は此三人の暴虐に堪へず、積屍山を爲し、流血川を爲し、其殘忍刻烈なる事、遠く蘇拉、猛黎亞に十倍し、三百の議官、三千の顯位、數千万の市民、之が爲めに死し、彼の愛國正義の大辯論家、智世魯も亦其犠牲たるを免れざりき。一城の氣運、殆ど此に覆滅に歸せんとする者の如し。

武良陀、圭士亞の東方に走るや、檄を四方に飛して兵を募る。來り會する者十萬人。然れども武良陀の爲す所、百事皆な心と齟齬し、其恩人核撒を

殺したるも、竟に國の爲めに一利を起す能はず、却て之が爲めに未曾有の暴亂を惹起し、國家蒼生をして、塗炭の苦に陥らしめ、加之に圭士亞と交情漸く離畔するに至りぬ。武良陀、圭士亞か貪饒鄙劣、官を賣り、下民を收斂するを見るに堪へず、嘗て大に此事を爭論し、後又相和すと雖も、一度は怒罵するの語、終に互に釋然たる能はず。且つ此時武良陀か最も親愛せる所の良妻、芳士亞病床に没しぬ。於是武良陀、千緒乖戾、又其心を慰藉する者なく、怏鬱として樂まざるに當り、又一怪事に遭逢し、倍ます其志氣を挫折せり。

武良陀の
洞裏

亞微土の
帳中

武良陀、將に兵を亞微土より移さんとするの前夜、獨り帳中に睡る。夜更けて、四營人靜まり、殘燈明滅として、影暗く、夢醒めて、越し方行く末を思ひ廻らし、深く今後の戰況、我運命の如何に落ち行くかを氣付ふれば、感慨坐るに胸に填て、復た眠に就く能はず。乃ち起きて、帳中を徘徊すれば、戸口に當て、微かに聲あるを聞けり。顧みれば醜惡なる偉形の妖怪の立

つを見たり。妖怪目を怒らして、武良陀を見る。武良陀之に問て曰く、汝何物なるぞ。又何の爲めに來れる乎。妖怪の曰く、武良陀、我は汝の惡魔也。再び汝と、比里巴の野に相見んと。武良陀の曰く、好し。再び汝と逢はんと。言未だ畢らず、怪物忽然として其處を見ず。

比里巴の
戰

亞微土帳
中の妖怪
再び顯は
る

既にして武良陀、圭士亞と共に、安教屋大唯の軍と希臘、比里巴の野に會戰す。武良陀憤闘身を士卒に挺し、大に屋大唯の部將を破る。然ども圭士亞の軍、悉く安教の爲めに破らる。武良陀、一隊の兵を分て、圭士亞の急を救ふ。圭士亞之れを見て、誤て敵兵來り追るとみし、其脱るべからざるを察し、竟に自刎して死す。圭士亞既に死し、武良陀其軍を合し、將に一戰を賭せんとす。時に嚮に亞微土の帳中に見たりし妖怪、再び顯はる。然れども又一語を發せずと云ふ。武良陀、想へらく我最後既に近けりと。乃ち軍に狗へんと欲し、殊死矢石を冒して闘ひしも、猶ほ未だ死するに至らず。然れども全軍悉く潰敗するを臨み見て、曰く、吾事去矣と。山頂に退き、願

て左右に謂て曰く、吾れ死して安教、屋大唯の心を歴足せしめ、以て其仇敵の念を茲に絶たしめんと欲すと、劍に伏して死す。是於兇黨殲矣。

第十章 結論

吾人今ま英雄經を叙述し來て筆を核撒の死に擱す。夫れ核撒國歩艱難の時に生れ、社稷擾亂し、蘇拉暴威を逞ふの際に成育し、蟠豹が功名赫灼として、威武四海を蓋ふの時に當て、漸く其頭角を政治壇上に顯はし來れり。其初め身を浮薄放縱の青年社會に嘲起し、粉粧假飾、優柔執務の貴公子より、一轉して辯論家となり、忽にして天賦の辯才を發揮し來りぬ。其議論の高妙なる、音調の麗莊なる、當時亦た之に及企する者亦し。是を以て弊政を痛撃し、冤罪を辯護し、大に國人の稱嘆を博し、同時に豪

華盛大なる饗宴を設て、國人を饗し、漸次に其歡心を收攬し、又交を蟠豹に結び、其庇蔭に依て、自家の地位を高ふし、此間神秘不測の權謀を運用し、遂に又高盧の都督と爲る。於是輕巧絶妙の政治家より、再轉して絶大の破壊家と變し、蠻貊を征服し、絶域を平定し、多年の戰鬪に依て、堅忍不拔の勇卒を育成し、又自家の心膽を練磨し、手に唾して、蟠豹大王を足下に蹂躪し、而して其勝利軍を率て、四海を横行し、宇内を蕩平し、遂に其國都に凱旋せり。是於三轉して、絶大なる建設家となり、國家の秩序を恢復し、生民の利富を計畫し、曆政を改め、道路を開き、港灣を築き、溝渠を通し、沼澤を疏水し、地畝を開墾し、廣大なる版圖の測量を成就し、千古未曾有の大法典を編纂し、或は又區宇を混一し、三千の諸國を總合して、大羅馬帝國を創立せんとしたるが如き、經國濟民の偉業、指を屈するに暇あらず。讀者若し、核撒が晩年、僅々たる短日月を以て、經營奏功したる其大功偉業を通觀し來らば、則ち是れ人力の能く及ぶ所に非ざるを悟らん。

嗚呼、天此の絶大なる偉人を生じて、此の大業を爲さしめ、羅馬の衰運を挽回せしめんとせしや知るべき也。然れども惜哉、身其終を全せず、大事半途にして、空しく燕雀狗鼠輩の爲めに虐殺せられ、遂に其志を完成すること能はず。嗚々此の英雄を暴虐せし奴輩、夫れ何物ぞ、皆な口に自由を唱へ、共和を叫ぶと雖も、是れ只だ嫉妬不逞の小人のみ。素より論ずるに足らず。獨り彼の武良陀ある者、或は少しく見るべき者あるか。彼れ羅馬名族の家に生れ、深く國人の尊信を負ひ、又國家自由の何物たるを知る。然れども固と是れ小拘の儒生也。遠慮深察の見識なく、其志も亦甚た卑近にして、固より經世救民の方畧なし。抑も當時羅馬の國情は、古昔共和の時を去る甚だ遠く、他邦の國民は、羅馬に來て住する者多く、羅馬民族の血統は、他邦人種の血統と混淆し、昔時其特有性たる、堅忍不拔、自治獨立の精神は、漸く茲に消亡し去り、人民卑屈に流れ、專制に馴れ、東方諸國の征畧は、徒に富度を濫増し、羅馬固有の簡素樸質の氣象を一掃し、全

く道德の障柵を破壊し、放縱逸樂は、滔々として、天下の人心を靡爛し、情綱糾紛し、人道潰敗し、擾亂殺戮は止む時なく、加之に、人口は非常に増殖し、屬地は倍ます多きを加へ、國家の事務は、又昔日の比に非ず。國勢既に斯の如くなれば、古昔大伯河邊に勃興したる、小自治市府の政体は、今日宏大無邊なる羅馬世界を維持するに足らず。故に若し今日にして政体に一〇大變更を加ふるに非ずんば、羅馬國土は必ず土崩瓦解の憂あらん也。蓋し羅馬の潰敗する、必らずしも敵國外患の逼るか爲めに然るに非ず。此の絶大なる版圖の主宰、頭腦たる羅馬都城將に自ら陵夷せんとするの危機に際したれば也。核撤の見る所、早く既に爰にあり。以爲く斬新活潑なる獨裁君主政体に非ずんば、以て此の危急を救ふに足らず。今日國家の泰平と繁榮は、只た一つの純正鞏固なる獨裁主の統治に因て得べきのみと。是を以て常に志を茲に存せり。然れども當時、天下聰明の士に乏しからずと雖も、復た一人として、大勢の傾く所を看破するの明なく、

守株是れ事とし、獨裁の君主を見る事、蛇蝎の如く而して國情の暗に既に之を要するを知らず、彼の智世魯敬東、武良陀輩の如き、當時の愛國者は、徒に古昔共和の政態を夢み、以爲く核撤微せば、社稷保つべしと焉。知らん、民政壞敗は既に業に一專制者の出づるを待つこと久しきを、嗚呼何ぞ其思慮の淺薄にして、變通の才識なきや。宜矣其志す所成らずして、徒に國家を擾亂の中に陸沈し、生靈を塗炭の裡に投没し、一敗肝腦地に塗れ、笑を後世の識者に遺す。天下の士鑑みずんば非らざる也。

嗚呼此の雄大なる人傑、空しく凶黨の毒手に斃れぬ、吾人痛嘆長大息に堪へず。吾人若し核撤か經營せし事業を通覽し來らば、一として是れ衰頹枯腐したる羅馬國民の政治、社會、智識、道德を革新すべき善良の舉措に非ざる無きを知らん。嗚呼此の人傑、今や既に逝けり矣。其生前に於て造就したる、幾多の功業偉績は、實に其洪大無邊なる胸中に瀟蓄せし所の、万分の一たるに過ぎず。然れども猶ほ其遺業殘跡にして、今日二千年

の後世に於て、吾人をして驚嘆絶倒せしむるに足る者あり焉。

嗚呼此の人傑、雄偉ある鴻圖と、多望なる無數の事業を遺棄して、空しく凶黨の毒刃に斃れぬ。其恨、蒼天何ぞ極まり有らんや。吾人千歳の後に生れて之れを想ふ、未だ嘗て血涙の滂沱たらずんば、あらず。彼れは實に幾多の事業に於て、驚嘆すべき希世の才識を有せり。彼れ忽にして將帥たり、忽にして辯論家たり、忽にして政治家たり、忽にして交際家たり、忽にして立法家たり、忽にして歴史家たり、忽にして詩家たり、忽にして數學家たり、忽にして建築家たり、而して其志向の投ずる所に從て、皆卓拔絶群の大才を發揮せざるはなし。吾れ於是乎知る、古今所謂天下の英雄豪傑なる者多しと雖も、皆な是れ淺識疎才の人たることを。彼等は只だ腕力あるを知て、他あるを知らざる者也。故に舌を鼓して非議する者あり、筆を揮て攻撃する者あり、亦之を駕馭するの術を知らず。或は之を捕へて、其手を斬り、或は之を嚇して、其口を箝し、以て誹謗辯難を免れん

とす、何ぞ其事を爲すの拙劣にして、粗獷なるや。我が核撒に至ては、則ち然らず。其爲す所、天真爛熳として、日月の皎然たるが如く、苦し長舌を揮て、論難し來る者あれば、即ち彼れ亦之に對するに、口頭三寸の舌を叩ひて、俊辯痛快、飛瀑の雄辯を以て、能く禦ぎ、能く撃ち、人をして又口を開く能はざらしむ。若し鐵筆を走らして、攻撃し來る者あれば、即ち又一枝の毛管を把り、一瀉千里、錦繡春華の文辭を揮て、能く辯し、能く排す。若し利劍を取て來る者あれば、即ち又腰間三尺の劍を用ひ、變化不測の術を運用し、戦へは必ず勝つ。凡百の事業、彼れ未だ嘗て敗を取らず。呼嗟、何ぞ夫れ核撒の多能多技なる是の如きや。

天下所謂英雄豪傑なる者多しと雖も、千歳仰て以て吾人が師表と爲し吾人が經典と爲すべき者、核撒を捨て、天下夫れ將た何の處に求めんや。上は世界創造の時より、下は其氓滅の時に至るまで、人類の此間に生死する、果して幾許あるや、知るべからずと雖も、我が戎麗亞核撒の如き者

焉ぞ又得べけんや。是れ實に造物主が吾人々類の規矩準繩として、與へ示したる者にして、世界人類の最も雄大なる記念碑也。吾人倚し此規矩を仰て進まば、功名を揚げ、富貴を取る。豈に何を難しとせんや。

吾れ今英雄經を編し、將に筆を絶たんとすれば、案頭の青燈、油盡き、明滅として、將に消へなんとす。乃ち燭燼を翦て、之か結を結び了て、筆を投すれば、時に東台の鐘聲、香々として、三更を報ず。起て園中を徘徊すれば、半輪の殘月、薛蘿の垣牆に落ち、北斗高く、霄漢に燦爛たり。今や億萬の人、夢に在て、人事凡て休し、草木亦眠て、萬物寂焉。乾坤復た一物の、此寂寥を破る者あらず。桂樹の下、獨り自ら懷想すれば、千感萬慨、方寸の中に紊れて、麻の如く、吾生蜉蝣の命を、大塊に寄す。眇たる滄海の一粟のみ、月星の無窮を見て、人生の須臾を嘆し、天地に俛仰して、獨り英雄の功業、乾坤と共に永く盡くる時、あきを羨む。噫、我儕未だ昔人の功業、さく平生を概念すれば、暗涙の青衫に、滂沱たるを覺へず。

核撤傳終

明治二十四年十一月廿三日印刷
同 年十一月廿四日出版
同 三十四年四月二十五日訂正再版

定價金四十錢

著者 松本君平

發行者 福永文之助

東京市京橋區采女町二十四番地

印刷者 村岡平吉

橫濱市太田町五丁目八十七番地

發行所 警醒社書店

東京市京橋區采女町二十四番地

印刷所 福音印刷合資會社

橫濱市山下町八十一番地



版權
所有

○外國語之研究	○立志の源泉	○倫理宗教時論	○英文天路歷程	○外交官領事官制度	○露清關係	○英雄崇拜論	○警世雜著	○後世への最大遺物	○近世神佛習合辨
内村鑑三著	平瀬龍吉著	岸本能武太著	ジョンパンヤン著	原敬著	綠岡隱士纂譯	住谷天來譯	内村鑑三著	内村鑑三著	足立栗園著
定價	定價	定價	並製 上製	定價	定價	定價	定價	定價	定價
郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅
二十五錢	四十錢	四十錢	六拾五錢	四十五錢	四十五錢	六十錢	三十錢	二十五錢	三十錢

右の外數百種あり目錄御入用の方は貳錢切手御送附次第進呈致候

